

カフカの「城」に関する試論(11) : ペピーをめぐる覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要. 一般教育系
巻	21
ページ	7-14
発行年	1992-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000387



カフカの「城」に関する試論

XI. ペピーをめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

XI. Notiz um Pepi

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO: The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951, JAPAN

(1991 年 11 月 26 日 受理)

1

フランツ・カフカの長編小説『城』(Das Schloß)には幾分か自伝的作品の色彩が強いせいか、作者カフカの生涯にわたって関わった幾多の女性像が群れ立って描出されていて、この作品の1つの特徴をなしている。とりわけ村の酒場の女給で長官 Klamm の恋人である Frieda、彼女の後見人を自他ともに称する宿屋の女将 Gardena、後に Frieda の後釜を自認する村娘 Pepi、バルナバス一家の姉妹 Olga と Amalia、村の小学校の女教師 Gisa、城の娘で少年 Hans の母、村長の妻 Mizzi、御者 Gerstäcker の老母、他に村の女達が数えられる。

Frieda の後釜として村の居酒屋で一時女給を務める Pepi の登場も、この作品が長編ながら、ついに未完であったために中断されてしまっている。

本稿ではこの村娘 Pepi に焦点を絞って、その形姿を分析してみる。

2

2.1. 主人公 K と Frieda の後釜 (Nachfolgerin) Pepi との初めての出逢いの場面は、

まだ灯のともっていない紳士館 (Herrenhof) で長官 Klamm を待ち伏せしようとした、第八章 (—Das Warten auf Klamm—) の冒頭部から始まる。暗闇の中で Klamm の部屋の覗き穴 (Guckloch) が一向に見つからず、K はようやくマッチをすった時、どうやら部屋のドアと配膳台の間のストーブに近い片隅で、うたた寝をしていた一人の若い娘 (ein junges Mädchen) が Pepi 本人である。当の Pepi の方はすでに村へ K が測量技師 (Landvermesser) としてやって来ているのを見聞していて、彼女の方から自らをまず名乗る。Ich heiße Pepi くの場面から始まっている。

「彼女 (Pepi) は小柄で、赤ら顔で、丈夫で、その房房とした赤味がかった金髪はしっかりとお下げに (in einem starken Zopf) 編んでいて、おまけにその髪は顔のまわりにちぢれていて、この娘は自分にほとんど似合わない、灰色の光沢のある生地ですきた、つるつるに垂れ下った服を着ていて、下の方でその服は子供らしく、蝶結びで終わっている絹のริボンで不器用にしめつけられていて、そのために窮屈そうだった」¹⁾。

それまでは客室付き女中 (Zimmermädchen) にすぎなかった Pepi が Frieda に代って一時なりとも酒場の女給 (Ausschankmädchen) になることが、どうやらこの村においては Pepi に不意に降って湧いた出世 (Pepis Aufstieg) を意味し、従って後述されるが、新しい地位のために、綺麗に髪を整え、優雅な服を身に付けることが成功の保証を意味することになる。この閉塞社会である城のある寒村で、城の役人達から授かる庇護は村の娘達の最高の名誉であるだけに、娘達の抱いた様々な夢と幻滅とが Pepi をしてまた語られるのである。

2.2. Pepi と Frieda との対比的描写は作者カフカの人生訓を帯びた女性観の比較として興味深くあり、また多彩な女性の群像が描出されているこの作品の中で、とりわけ注目に値しよう。

「もちろん彼女 (ペピー) はフリーダよりずっと若くて、ほとんどまだ子供しかかったし、着ている服は滑稽で (lächerlich)、明らかに酒場の女給の意味について彼女が抱いている過大でいろんなイメージに合わせた (entsprechend den übertriebenen Vorstellungen) 身形をしているのだった。そしてこのイメージを彼女なりに抱くのはもっともなことであった。というのは彼女にとってまだ全くぴたり合っていなかった地位 (die Stellung) がおそらく予期しないもの (unverhofft) であり、労せず得たもの (unverdient) であり、それだけに彼女には一時的に (vorläufig) 与えられたものにすぎなかったのだった」²⁾。

こうして Pepi が自己の立場に対して子供らしく無分別で、他ならぬ城との関係 (Beziehungen zum Schloß) という自分の持っている財産 (Besitz) を自覚せず、この紳士館の酒場で寝過している Pepi に K は結局一指触れることなく作品は中断されている。

とはいえその後の村における K の困難な道に対して、幾分か勇気を喚起させてくれるにちがいないとも K には思われて、食欲に (gierig) Pepi を見つめている K の関わりようを見逃してはならない。

2.3. 成上り者の Pepi の仕草は勿体振った威厳さを帯びたところがあり、いわゆる空威張 (Großtuerei) の体であり、つまりは実体のない好奇心にすぎない (nur wesenlose Neugier) ものであった。それ故にいつまでも酒場に集まる村人達からも果てなく無関心な物笑いに (ewig gleichem Lächeln) ほとんど無頓着のままであった。何よりも Pepi の酒場での地位は本当に当座の、一時的なものであることだけは、反目し合うバルナバスの姉娘 Olga の指摘を待つこともない。つまり Pepi は全く小娘 (die ganze kleine Pepi) にすぎないとしか見られてなかったことは確かである。

2.4. 作品上での Pepi の再登場は主人公 K がすべての自分の努力が徒労であることを自覚し始めて、非常に疲労に襲われ、役人 Bürger につづいて 2 回目にあたる役人 Erlanger による尋問から離れて、酒場に戻ってきた時である。眠らせてほしいと願う K の眼前に、橋屋の女将 Gardena から呼ばれて、暗闇からぬっと現われて、もはや絶望のあまりに髪を毛をもじゃもじゃにさせて (zerrauft), Pepi も疲れはてて (müde), だらし無く姿を現わすのである。どうやらその晩から Frieda が女給に復帰するというので、Pepi はすでに 24 時間の猶予 (eine vierundzwanzigstündige Frist) で解雇されるという。Pepi の悲嘆は他ならぬ再びこの紳士館から出て行かねばならないことに由来していて、その上、K を同じ苦悩を分つ友人のように (wie zu einem Leidensgenossen) 自らの悩み (Leid) を K に語りかける。そもそも Pepi の不運は K に責任がある (eigentlich er Pepis Unglück schuld sei) という。どうやら不満を語りながらも、その場限りの夢みる臨時の女給 Pepi は K を愛し始めている (In jener Zeit liebte sie K) ことが明らかになってくる。いずれにせよ K が Frieda をこの酒場から連れ出したが故に、逆に Pepi の出世 (Pepis Aufstieg) が可能になったことは事実にはちがいないのである。

2.5. 作品『城』の最終章、第 25 章³⁾ は中断されてしまったが、この Pepi の K への思いが披瀝される章でもある。とりわけ Pepi の一方的で、未熟で、一面見当はずれの K への思慕が誇張して告白される。Pepi にとって K はどうやら英雄 (ein Held) であり、娘達の解放者 (ein Mädchenbefreier) であるという。更に自尊心を持って女性同志として Frieda に張り合うことができると、持前の自負心を Pepi は言明する。

「彼 (K) が身に引き受けたその重荷 (Last) は他ならぬフリーダであったということが、彼女 (ペピー) の目には彼 (K) の行為 (seine Tat) を高めたこととなり、更に彼 (K) がペピーを連れ出すために短く、薄くなった髪をした不美人で (unhübsches), 年増な娘

(フリーダ), 加えて陰険な娘 (ein hinterhältiges Mädchen) であるフリーダを自分 (K) の恋人に (zu seiner Geliebten) したということの中に, どこか想像を絶する無私で無欲なもの (etwas unbegreiflich Selbstloses) がある¹⁴⁾と, Pepi は勝手にいう。

Pepi にとって主人公 K は理解の域を越えた風変りな人間 (ein sonderbarer Mensch) でありながらも, Pepi 自身を救い出してくれる選ばれた人 (Auserwählter) と信じて疑わないのである。そして Frieda とでは決して体験できなく, 世間のあらゆる名誉地位などから左右されない本当の愛 (wahre Liebe) を, 他ならぬ K に教えてやろうと気構えているのだ。まさにこの Pepi の形姿は世間知らずで自意識過剰で, 閉ざされた田舎の村の中でひたすら自尊心と自負心だけが肥大した, 気張った村の小娘の典型とまず考えられよう。

2.6. Frieda が K と訣別して再び酒場に戻ることによって, Pepi の目論見はすべて無駄 (alles vergeblich) となり, 素手でまた元の部屋付の女中の仲間に戻ることであった不運 (ein Unglück) は, すべて K の軽率さ (leichtsinnig) によるものと非難した。そしてまずはこの最終章でわずか4日間の酒場での仕事ぶりを, Pepi は Frieda のそれと自分なりに比較して語り尽くす。女給として Frieda の持つ手練手管 (Künste) も慢心 (Hochmut) もともなうことなく, つまり Frieda と異なって, Pepi は誰れとも親しくしてきた (Pepi war zu jedem freundlich) という。しかし自ら打ち開けているように, Pepi の女給としての最大の不運 (größte Unglück) は4日間のうちに村の女達の司令官である, 長官 Klamm が最初の2日間村に滞在していたにもかかわらず, 一度も Pepi の前に姿を現わさなかったことだと嘆いている。臨時の女給 (die Provisorische) からの脱皮を賭けている Pepi にとっては, もし Klamm がやって来ていたら, それは Pepi にとって決定的な試練になっていたであろう (das wäre Pepis entscheidendste Erprobung gewesen) と想像している。こうした Pepi の胸中は Frieda とは異なった女給の魅力に自信を持ち合せていたのであり, Klamm が来なかったことはあくまでも偶然から (aus Unfall) だと, 手前勝手に信じ込み, ただひたすら期待からくる不安 (die Unruhe der Erwartung) と願望 (das Verlangen) とを持って立ち働いた Pepi は, 結局のところ自らの徒労なる行為を自覚せずにいられなく, 絶え間ない幻滅 (diese fortwährende Enttäuschung) を味わい尽し, ついに疲れ果ててしまうのである。こうした徒労の形姿は少なくともこの作品『城』の中で語られる1つの典型的な生きる形式であり, パルナバス一家の者達もその代表であるが, 誰れよりも主人公 K の生きる形式であり, この点で Pepi と K の共通性に注目できよう。

そして, 「私達二人はどちらも騙された人間だわ」と, Pepi が K に言う時, K と Pepi

の共通性が Frieda との対比で語られる。二人はすべてに余りに騒々しく (lärmend)、子供じみていて (kindisch)、未経験 (unerfahren) であるとして、Frieda の落ち着き (Friedas Ruhe) や Frieda の即物性 (Friedas Sachlichkeit) との決定的な相違を挙げ、K は Pepi の女給への不適格性 (nichtgeeignet) を説いて、更に付け加えて Frieda の方はもう酒場では女給の視線ではなくて、ほとんど女将の眼差しだとさえ K は味方して述べている⁵⁾。

2.7. 「ペピーは話を終えた。彼女は深く吐息をしながら、2, 3 滴の涙を眼と頬からぬぐい、それから K をうなづきながらじっと見詰めた。あたかも彼女は次のことを言おうとしているかのようなだった。結局のところ彼女の不運は全く大事なことでなく、彼女はその不運を耐えて、それに対してどの人からも、ましてや少なくとも K からの援助も慰安も (weder Hilfe noch Trost) 必要としないだろうし、他ならぬ自分のこの不運は (ihr Unglück) ただ自分のいろんな知識の確証にすぎなく、問題なのは K のことであり、自分 (ペピー) は彼 (K) に姿 (ein Bild) を見せたいと思ったので、すべての自分の希望が挫折した後でも、自分 (ペピー) はそうすることが必要なことだと思っていた」⁶⁾ と、Pepi は弁解がましく述べるのである。

この Pepi のしみじみとした告白に対して K は即座に「ペピー、君は何んという乱雑な空想をしたものかね (Was für eine wilde Phantasie)」⁷⁾ と評して、それは Pepi の元の暗く、狭い女中部屋から発想した夢想以外の何物でもなく (das ist ja nichts anderes als Träume), また珍奇な (sonderbar) に思われていると、一笑に付しながら K は諷めるのである。

2.8. K はこうした切実な Pepi の甲斐甲斐しさに対して、一種の同情の感情を持ちながら、Pepi の言い分に「君は一抹の真実を (einem Schimmer der Wahrheit)」⁸⁾ と、判断していることも見逃してはならない。しかし何はともあれ女給の地位に望外な夢と未練をいだきつづける Pepi に対して、「本当のところは君はこの地位には相応しくなく、不適格さ (diese Nichteignung) は全く明白にちがいないのだよ」⁹⁾ と、K は断定的に言明してやまないのである。

2.9. Harmut Binder の解釈によれば¹⁰⁾、まず Pepi は作者 Kafka の原体験 (Urerfahrung) から考案された女性像であり、他の女性の登場人物 Frieda, Olga, Amalia, そして女教師 Gisa と異なった形姿であるとしていて、伝記的視点からすると、Pepi は Kafka が Meran で出会った >Stubenmädchen< (小間使い) を思い出たせ、更に 1921 年初めに妹 Ottla に Kafka が宛た手紙の中で、一人の若くて小柄な娘に少し心を奪われている >ein wenig beschäftigt<¹¹⁾ と、書いている事実を Binder は指摘している。

2.10. 作者 Kafka と友人 Max Brod との関係で Pepi のモデルを挙げてみると、1922 年 8 月に Kafka は Brod の女友達に手紙を出しているが¹²⁾、その女友達は当時 Berlin のホテルで Stubenmädchen をしていたという。そのホテルで Kafka 自身も宿泊し、後に Brod が 1958 年に出版した彼の自伝的な小説のタイトルに >Stubenmädchen< を付していることも興味深い。またすでに 1907 年に出版された Brod の初期の短篇 >チェコ人の女中< (das tschechische Dienstmädchen) に Pepi という名の女中が登場するという。作品『城』の Pepi は本来 Stubenmädchen (Zimmermädchen も同義) であり、Dienstmädchen であることからすると注目に値する資料であろう。

2.11. Marthe Robert によれば村の女達は皆な疲れを知らない働き者であるとして、腕の確かな女工であり、Frieda と Pepi はとりわけ勇壮などいってよい女中であると解釈し、Pepi は K と知り合う以前から K に夢中になっていて、>Pepi への愛は探索へ彼 (K) を前進させこそすれ、引き留めることはない<¹³⁾ と解釈している。ここには K を >苦難を共にする人< (Leidensgenosse)、>英雄< (Held)、>娘達の解放者< (Mädchensbefreier) と称する Pepi の賛美に基づいて、Marthe Robert は主人公 K を中世の >聖杯の英雄< に類している。

2.12. Walter Emrich は Pepi が K に向って Frieda を非難すればするほど、Frieda の賢明さや経験深さや冷静さが浮き立ち、その逆に Pepi の幼稚さが浮び上ってくるという作品の仕掛けを力説し、「Pepi は Frieda と異なって、群衆に対置しうる固有の自己を持っていない」¹⁴⁾ と評している。つまり Pepi の K へいだいた通俗的な愛の形式に対して、作者 Kafka の批判が秘められているとして、Frieda の個人的な愛の形式と Pepi に代表される集会的な愛の形式を対置して Emrich は論じている。

この Emrich の解釈に関連して筆者の見解を更に付け加えるとすれば、作者 Kafka の 40 余年の短い人生で体験した愛の形式は、この作品『城』で大別すると 3 つの形式が考えられる。1 つは K と Frieda との間で展開される闘い取る愛、奪う愛の形式であり、自伝的には Milena との愛が対称となろう。2 つ目の愛の形式は Amalia の形姿に代表される拒む愛、絶対の孤独なる愛といつてよいもので、自伝的には Felice と Kafka との実らない愛を挙げてよいだろう。3 番目の愛の形式は Pepi の K への愛の形式が考えられて、求める愛、献身する愛と呼称できようか、自伝的視点からすると、やはり Felice の女友達 Glete Bloch¹⁵⁾ との愛であり、Kafka 最後の恋人 Dora Diamant¹⁶⁾ との相愛の形式といつてよいだろう。

2.13. Kafka の他の作品から考察すると、後期の短篇 >歌姫、ヨゼフィーネ< (Josefine, die Sängerin oder Das Volk der Mäuse) にある女主人公 Josefine の略称は

Pepi ということになる¹⁷⁾。また伝記的視点からすると、上記の Kafka が没する前の半年間、Berlin で共同生活をした当時 21 歳のユダヤ人女性 Dora Diamant の面影が、この Pepi の形姿と多少なりとも重なるところが考えられるが、Kafka と Dora の出逢いはこの作品『城』を中断した後、少なくとも 1 年後となれば、時間的に Dora が Pepi のモデルでありえなかったことは確かである。

3

作品『城』は最終章で御者 Gerstäcker の老母の登場で中断されるが、その直前に K が「春までどのくらいあるのかね」と、Pepi に尋ねる対話がある。そこで村を支配する城が遠望できるこの一寒村の長い冬と短い春夏とに耐えて生きている村人、とりわけ村娘達の感慨を込めて Pepi はモノローグのように次の返答をする。「冬はこの地では長いです。本当に長い冬で退屈なほど単調です。下の村にいる私達はそんなことは嘆き悲しみはしません。冬に対しては私達は安全に身を守ってきました。とにかく春も夏もめぐってきますし、その時節は確かにありますが、思い出してみますと、まるで 2 日間以上もないかのようには夏は随分に短く、その日でさえも、ずっと快晴の時でも時々雪が降ったりするのです」¹⁸⁾。

主人公 K の村での徒労なる行動が寒い冬の中で果てなくつづくことが十分予想でき、また K と Pepi との愛の展開が暗示され、予感されつつも、大方は停滞したまま K と Pepi の対話もここで中断されて、ついに作品『城』は未完のまま放置されてしまったのである。

Anmerkungen

- 1) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 157f.
- 2) Ebd. S. 159.
- 3) Das Schloß の Kritische Ausgabe von Malcolm Pasley 1982 年版では第 25 章となっているが、Max Brod 版では第 20 章に配置されている。
- 4) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 454.
- 5) Ebd. S. 481.
- 6) Ebd. S. 479.
- 7) a. a. O.
- 8) Ebd. S. 480.
- 9) Ebd. S. 481.
- 10) Binder, Hartmut: Kafka in neuer Sicht, J. B. Metzler, 1976, S. 458ff.
- 11) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu den Romanen, Winkler, 1982, S. 368.

- 12) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924, S. Fischer, 1983, S. 411f.
- 13) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの [L'ANCIEN ET NOUVEAU], 城山良彦他訳, 法政大学出版局, 1973, p. 202.
- 14) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka, Athenation, 1975, S. 330.
- 15) Grete Bloch は 1892 年 3 月 21 日 Berlin に生まれ, 1913 年 4 月に Felice Bauer と知り合った。プラハで Kafka が 21 歳の Grete Bloch に初めに会った時, >一人の繊細で, 若くて確かにどこか不思議な感じのする少女< (ein zartes, junges, gewiß etwas merkwürdiges Mädchen: Briefe an Felice, S. Fischer, S. 473.) と驚いている。Kafka とは 1913 年 10 月 29 日付から 1914 年 10 月 15 日付の約 1 年間にわたって文通し, その後イタリアへの亡命の際に, Kafka の彼女に宛てた手紙の一部を女友達に手渡し, ドイツ軍がイタリアを占領した時に, Grete Bloch も他のユダヤ人達と一緒に逮捕され, おそらく強制収容所への送還の途中か, 収容所内で 1941 年か 1942 年に死亡したと考えられている。Kafka はこの Grete Bloch を初めは Felice との橋渡し役として, 単に表向きの付き合いであったにもかかわらず, しだいに彼女を愛し始めていったことも確かである。異説によれば, 1914 年に Kafka との間に出来たという彼女の息子が 1921 年に 7 歳でひそかに死んでいるとも伝えられているが, もちろんその真偽は明らかではなく, ましてや Kafka 自身は全く関知してないことでもあった。
- 16) 1924 年 6 月 3 日ウィーン郊外のキールリングにあるサナトリウムで Kafka 臨終の床に付き添った, Kafka 最後の恋人 Dora Diamant は 1902 年にポーランドに生まれ, 1952 年 8 月にロンドンで亡くなっている。1923 年 7 月 13 日に Kafka は西ユダヤ人でハシディムのラビ (ユダヤ教師) の信奉者の娘で, 飾り気なく, 親切な少女である 19 歳の Dora Diamant に出逢った。9 月 24 日には Berlin で再会し, 共同住宅に移ることを二人は決心した。Dora は熱心なヘブライ教徒でもあり, Kafka に原語でイザヤ書を朗読してやった。後に Kafka の助言を入れて, 女優の教育をうけた。1924 年の春には Kafka はこの Dora と結婚するつもりであったが, 彼女の父親が同意を拒んでいた。Kafka 亡き後, 1933 年にゲシュタポ (国家秘密警察) が Dora の住居で Kafka の原稿の山を押収して, その原稿の行方は今日も不明のままである。
- 17) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu den Romanen, Winkler, 1982, S. 313.
- 18) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 488.

尚, 引用文の () 内は原文に即した筆者の補注である。